

中級試験発心プリント①／御書学三篇（背景編）

問 次の文は、今年の御書学習会で学習した「開目抄」・「顕仏未来記」・「四条金吾殿御消息」が著わされた背景について述べられています。文中の〔ア〕～〔タ〕には適当な言葉を、〔イ〕～〔ウ〕には三篇の御書のいずれかで、それぞれ答えなさい。

文応元年七月、大聖人は〔ア〕をもちて幕府を諫めさめるが、これに対して幕府は聞き入れるどころか、翌八月には〔イ〕の草庵を焼き打ちにし、翌弘長元年五月には〔ウ〕の

〔エ〕へ流罪したのである。弘長三年になって、大聖人は赦免されて鎌倉へ帰られたが、翌文永元年十一月、安房の〔オ〕で傷を負うなど、大聖人に対する迫害は激しくなる一方であった。

そして、文永八年九月十日、日ごろ大聖人を最も憎んでいた〔カ〕頼綱が執権職代理として、幕府の奉行所に呼び出し、前執権であった北条時頼・重時を「無間地獄におちた」といいふらしているとの嫌疑で取り調べを行った。大聖人は〔カ〕に向かつて厳然と諫められ、迫り来る国難にあたって覚醒を求められたが、

翌々日の九月〔キ〕日、再度の反省を求めて著わされた御書状が『一昨日御書』である。

これですます怒りに狂った〔カ〕は数百人の家来を引き連れて、〔イ〕の草庵に押し入り大聖人を捕え、その際少輔房が法華経第五の巻で大聖人の頭を打ちすえたのである。

〔キ〕日夜半、大聖人は〔ク〕へと向かわれ、頸の座にのぞまれる。

途中、由比ヶ浜からお供したのは〔ケ〕の対告衆となった〔ケ〕である。

翌日、大聖人はひとまず相模国依智の本間六郎左衛門の館に移されことになる。この約二十日間の滞在中に著わされたのが〔ク〕である。

〔ク〕の斬罪については、〔カ〕が独断で行ったもので、この間、執権〔ク〕は大聖人の無罪を認め、刑の執行の中止を指示している。しかし、大聖人が本間邸に滞在中、鎌倉で火つけや人殺しが相次ぎ、これは大聖人の弟子たちの仕業であると、念仏者たちが幕府に讒言を述べたため、再び弾圧の手が弟子・信者に及び、大聖人に対しても〔サ〕流罪が決まったのである。

十月十日に依智を発ち、二十八日〔サ〕到着、十一月一日〔サ〕の〔シ〕三昧堂に入られた。

〔サ〕での生活は筆舌に尽くしがたいものであり、火の気などありようもない厳寒である。監視も厳しく、弟子たちも大聖人のもとに行くことも至難のことであった。その中でただお一人大聖人のお供をされたのが〔ス〕である。一度流罪されれば、とうてい生きては帰れぬといわれるところである。まさに、死罪同様なのである。

〔サ〕は元々念仏者の国土で、大聖人の命をつけ狙う者もおり、その一人が「念仏無間のわけをいえ」と詰め寄り、逆に論破され、念仏を捨てたのが〔セ〕である。

翌一月十六日には、〔サ〕の周りの国々から念仏・真言などの僧が集まったの〔シ〕問答が行われた。大聖人は次々と破折され、その場で邪信を捨てる者も少なくなかった。

これに対して、念仏者たちは鎌倉の役人を通し、「大聖人の弟子になった者は国を追い出し、牢に入れてよ」との下知を出させるといふ陰険な手段にさえ出たのである。

同年二月、こうした状況の中で著わされたのが〔セ〕である。

さらに同じ頃、かねてから大聖人が〔ア〕で予言されていた〔セ〕難が現実には起きるのである。これが世にいう「二月騒動（北条時輔ときげの乱）」である。

このように大聖人の予言が事実となって現われたことに幕府は恐れをなし、捕えて牢に入れていた大聖人の弟子・信者たちを放免する一方、四月には大聖人を〔シ〕三昧堂から〔タ〕に移すように命じている。これ以来、大聖人への監視も以前より軽くなった。

翌文永十年五月、この〔タ〕で著わされたのが〔セ〕と『如説修行抄』である。

そして、翌文永十一年二月には、ついに赦免となり、三月二十六日に鎌倉に無事に帰られたのであった。

中級試験発心プリント⑥／開目抄(大意編)

問 次の文は、今年二月の御書学習会で学習した「開目抄」の大意について述べられています。文中の

ア ハ にあてはまる適当な言葉を答えなさい。

本抄は、『種種御振舞御書』に「去年の十一月より勘えたる開目抄と申す文二巻造りたり、頸切るるならば日蓮が不思議とどめんと思いて勘えたり、此の文の心は日蓮によりて日本国の有無はあるべし(中略)かやうに書き付けて中務三郎左衛門尉が使にとらせぬ」(御書全集九一九頁)と仰せになられているように、ア に託された御抄である。

また、本抄の題号について、日寛上人は文段集『開目抄愚記』で、次のように述べられている。

「今、開目抄と題することは、盲目(ももも)を開く義なり。所謂(いわゆる)、日本国の一切衆生、執権(しゅゑん)等の膜(まく)に覆(おお)わるる為(ため)に真実(まこと)の三徳(さんとく)を見ること能(あた)わらず、故(ゆえ)に盲目(もも)の如(ごと)し。然(しか)るに当抄(たうしやう)に、一切衆生(しやうじやう)をして盲目(もも)を開(ひら)か(し)むるの相(さう)を明(あ)かす、故(ゆえ)に開目抄(かいもくしやう)と名(な)づくるなり」(文段六二頁)また、「凡(お)よそ当抄(たうしやう)の大意(たいい)は、末法(まっぽう)下種(げしゆ)の人(ひと)に(ん)の本尊(ほんそん)を顕(けん)すなり。謂(い)わく、蓮祖(れんそ)出世(しゅっせ)の本懐(ほんくわい)は但(ただ)三箇(さんかん)の秘法(ひぽう)に在(あ)り。然(しか)り(と)雖(いえども)、佐渡(さわた)已前(いぜん)に於(お)ては未(いま)だその義(ぎ)を顕(けん)さず。佐渡(さわた)已後(いご)にこの義(ぎ)を顕(けん)すと雖(いえども)、仍(い)な(お)当抄(たうしやう)等(ら)に於(お)ては未(いま)だその名目(なみやう)を(み)よ(も)を(み)出(い)ださず。然(しか)りと雖(いえども)、その意(い)は恒(つね)に三箇(さんかん)の秘法(ひぽう)に在(あ)り。中(な)に於(お)て当抄(たうしやう)は先(ま)ず末法(まっぽう)下種(げしゆ)の人(ひと)の本尊(ほんそん)を顕(けん)すなり。故(ゆえ)に当抄(たうしやう)の始(はじめ)に三徳(さんとく)の尊敬(そんぎやう)等(ら)を標(ひょう)し、次(つぎ)に儒外(じゆげ)に(つ)ついで内典(ないてん)を(あ)らわ(し)やくする中(な)に、先(ま)ず一(い)代(だい)の浅深(せんじん)を判(はん)じ、熟脱(じゆくだつ)の三徳(さんとく)を顕(けん)し、蓮祖(れんそ)はこれ法華經(ほっけ)の行者(ぎやう)なることを明(あ)かす。卷(まき)の終(はら)いに至(いた)りて正(ただ)しく下種(げしゆ)の三徳(さんとく)を顕(けん)し、『日蓮(にっれん)は日本国(にっぽん)の諸人(しよじん)に(し)う(主)し(師)父母(ふぼ)親(おや)なり』というなり」(同)と本抄(ほんしやう)の大意(たいい)を論(ろん)じられている。

さらに、同記「入文の大科の事」によるならば、本抄上下二巻の文を標・釈・結の三つに分けることができるとしている。

最初に、イ のウ をあらわすゆえに、エ の を尊敬すべきを標示し、次いで、儒家・外道・内典のそれぞれの三徳をあげて釈しており、さらに内典の三徳について、まず一代五十年の諸經を判ずるに五段の教相(お)の を説かれ、なかんずく第五のカ 相対の教相は、キ のイ のウ の であることを明かし、ケ の三徳をあらわした。そして、大聖人が正(ただ)しく法華經に予言された末法唯一人の コ の であり、サ の再誕であるむねを述べて、イ の三徳の深恩をあらわしたのである。

また、イ のコ のシ は、シ の が競(あ)い起(お)こることは、經文の予言の通りであり、邪智謗法の極悪人が充滿するヌ において、セ の功德によつてのみ、一切衆生が救われるがゆえに、大聖人はソ の姿で、下賤の衆生の中(な)に出現(しゆげん)されたのである。

次に、広く疑いをあげて、コ の なることを明(あ)かされ、この疑いをあげてのち、法華經(ほっけ)の品の經文を引いて、シ の をあらわし、末法の コ の は大聖人以外(い)にないことを断定(だんてい)され、なにゆえ コ の が、諸天(しよてん)の加護(かご)がなく、難(がた)にあうかを以下(い)のように示(し)されている。

第一に法華經の行者が、過去世に法華經誹謗の罪があるか、ないか。
第二に謗ずる者が、地獄に墮つべきときには現罰はない。
第三に諸天が国土を捨てて去ったゆえに現罰がない、と。

本抄の文意によれば、日本国は悪国(あくこく)のゆえに、ツ は国を捨てて去り、墮地獄(だじごく)必定(びじやう)のテ の であり、大聖人はト にナ があるゆえ、謗(わ)ずる者にニ なく、大聖人はじめ一門に大難があるとされている。大聖人がト にナ があるゆえ、の者(もの)のみで、この時に出現する仏に約するがゆえである、と述べられている。そして、大聖人は、イ のネ の仏としての御決意を述べられ、釈の終わりでは、末法適時の弘教を明(あ)かして、日本国は邪智謗法の者多き破法の国なるがゆえに、ヌ はハ なりと断定(だんてい)されている。

最後結では、大聖人がノ のス の御本仏なることを仰せられている。

『発心プリント⑥』で引用した「種種御振舞御書」の御文(御書全集九一二～七行目、九一四～七行目)の通解(現代語訳)を、次に太字で示しました。

十日のときと十二日の逮捕の夜、真言宗の失や禪宗・念仏宗の誤り、良観が雨を降らせなかったことを詳しく平左衛門尉にいい聞かせたところ、ある者はどつと笑い、ある者は怒った事などは煩わしいので記さない。詮ずるところ、六月十八日から七月四日まで良観が雨乞いをして、日蓮に阻止されて降らしかねて、汗を流し、涙だけ流して雨が降らなかつたうえに逆風が絶えず吹いたこと、この祈りの間、三度まで使者をつかわして「一丈の堀を越えられない者がどうして十丈・二十丈の堀を越えられようか。(和泉式部が好色の身でありながら、八斎戒で制止している和歌を詠んで雨を降らし、能因法師が破戒の身として和歌を詠み雨を降らせたのに、) どうして二百五十戒の持者ともあろう人々が百千人も集まって七日、ふた七日も天を責め立てられたのに、雨が降らないうえに大風が吹いたのであるか。これをもつて知りなさい。あなた方の往生は叶うまい」と責めたので良観が泣いたこと、彼がこの敗北を逆恨みして権門勢家に取り入って讒言したことなどを、一つ一ついい聞かせたところ、平左衛門尉等が良観の味方をしたが、弁護しきれなくなってしまうことなどは繁多であるからここには書かない。

さて十二日の夜は武蔵守宣時の預りで、夜半になって頸を斬るために鎌倉を出発したが、若宮小路に出たとき、四方を兵士が取り囲んでいたけれども、日蓮がいうには「みんな騒ぎなさるな。ほかのことはない。八幡大菩薩に最後に行くべきことがある」といって、馬から下りて大音声でつぎのように入った。「いったい八幡大菩薩はまことの神であるか。(和気清麻呂が頸を斬られようとしたときはたけ一丈の月と願われて守護された。伝教大師が宇佐八幡宮の神宮寺で法華経を講じられたときは紫の袈裟をお布施として授けられた。) 今日蓮は日本第一の法華経の行者である。そのうえ身に一分の過失もない。日本国の一切衆生が法華経を誹謗して無間大城に墮ちようとしているのを助けるために法門を説いている。また大蒙古国からこの国を攻めるならば天照大神・正八幡であっても安穩ではおられない。そのうえ釈迦仏が法華経を説いたときには多宝仏・十方の諸仏・菩薩が集まって、そのありさまが日と日と月と月と星と星と鏡と鏡とを並べたようになったとき、無量の諸天並びにインド・中国・日本の善神・聖人が集まったとき、仏に『おの法の華経の行者に対して疎略な守護はしないという誓状を差し出さない』と責められたので一人一人誓状を立てたではないか。そうである以上は日蓮がいうまでもなく、大至急誓状の宿願を果たすべきである

のに、どうしてこの場所には来合せないのか」と高々といった。そして最後には「日蓮が今夜頸を斬られて靈山浄土へ参ったときには、天照大神・正八幡こそ起請を用いない神であったと名を指しきつて教主釈尊に申し上げよう。それを痛いと感じられるならば、大至急お計いなさい」と叱って、また馬に乗った。

由比ヶ浜へ出て御霊社の前にさしかかったとき、また「しばらく待て殿方、ここに知らせるべき人がいる」といって、中務三郎左衛門尉という者のところへ熊王という童子を遣わしたところ彼は急いで出てきた。「今夜頸を斬られに行くのである。この数年の間願ってきたことはこれである。この娑婆世界において雉となったときは鷹につかまれ、ねずみとなったときは猫に食われた。あるいは妻子の敵のために身を失ったことは大地微塵の数よりも多い。だが法華経のためにはただの一度も失うことがなかった。そのために日蓮は貧しい仏道修行の身と生まれて父母への孝養も心にまかせず国の恩を報ずべき力もない。今度こそ頸を法華経に奉つてその功德を父母に回向しよう、その余りは弟子檀那に分けよう、といってきたことはこれである」といったところ、左衛門尉兄弟四人が馬の口に取りついて供をし、腰越・竜の口へ行った。

頸を斬るのここであるかと思っていたところが、案にたがわず兵士どもが取り囲んで騒いだので、左衛門尉が「今が最期です」といって泣いた。それをさとして日蓮が「不覚の殿方である。これほどの喜びを笑いなさい。どうして約束を違えられるのか」といったとき、江ノ島の方向から月のように光った物が鞠のように東南の方から西北の方角へ光り渡った。十二日の夜明け前の暗がりでの顔も見えなかったが、この光りもののため月夜のように人々の顔も皆見えた。太刀取りは目がくらんで倒れ臥し、兵士共は怖れて頸を斬る気を失い一町ばかり走り逃げ、ある者は馬から下りてかしまり、ある者は馬の上でうずくまっている。日蓮が「どうして殿方、これほど大罪ある召人から遠のくのか。近くへ寄つて来られよ。寄つて来られよ」と声高に呼びかけたが急ぎ寄る者もない。「こうして夜が明けてしまったならばどうするのか。頸を斬るならば早く斬れ。夜が明けてしまえば見苦しかろう」とすすめたけれどもなんの返事もなかった。

中級試験発心プリント⑦ / 開目抄(御文編)

次の二月度御書学習会で学習した「開目抄」の御文について、あとの問いに答えなさい。

『詮ずるところは天もすて給え諸難にもあえ[]を期とせん、[]が六十劫の[]の行を退せし乞眼の婆羅門の責を堪えざるゆへ、久遠大通の者の三五の塵をふる[]に値うゆへなり、善に付け悪につけ法華経をすつるは地獄の業なるべし、大願を立てん日本国の位をゆづらむ、[]をすてて観経等について後生をこそよ、父母の頸を刎念仏申さずば、なんどの種類の[]・出来すとも[]に[]やぶられずば用いじとなり、其の外の大難・風の前の塵なるべし、我日本の柱とならむ我日本の眼目とならむ我日本の大船とならむ等とちかいし願やぶるべからず』

問一 文中の[]にあてはまることばを答えなさい。

問二 傍線アについて、次の文の[]にあてはまることばを答えなさい。

大聖人は本抄で、「[]此国をすつるゆえに[]なきか[]の世をば[]すて去り[]まほるべからずかるがゆへに[]を[]ものにしるしなし還つて[]に値うべし」(御書全集二二二頁)と仰せになり、これについて、日寛上人は「開目抄愚記」で、「問う、諫曉八幡抄に云く『経文の如くんば[]と申す人をば大梵天・帝釈・日月・四天等・昼夜に[]すべし』(御書全集五八八頁)と云云。豈(あに)相違に非ずや答う、諸天謗法の国を捨離(しやり)すとは、安国論所引の四経の文に分明(ふんみ)よなり。已(すで)にその国を去れば、正法の行者も自ら放捨(ほうしゃ)せらるるの義なり。然(しか)りと雖(い)えども、若し正法の行者その国に在らば必ず守護したまうべし。これ共業別感あるが故に進退の判釈を設(も)つけたまえり。故に諫曉八幡抄に云く『此の大菩薩は宝殿をやきて天にのぼり給うとも[]の[]・日本国に有るならば其の所に栖(す)み給うべし』(同頁)と。また四条金吾抄に云く『されば[]は不正直をにくみて天にのぼり給うとも、[]の[]を見ては争(い)かぞか其の影をばをしみ給うべき』(御書全集一九七頁)と云云。この意なり。故に今諸天善神、守護なしというとも、また守護あること分明なり。所謂(いわゆる)竜の口の光物、依智の星下り、豈現証に非ずや」(文段集二〇四頁)と、述べられている。

問三 傍線イの語訳について、次の文の[]にあてはまることばを答えなさい。

「[]塵点劫の昔に[]本果の[]に結縁して下種を受けた衆生」と「[]塵点劫の昔に出現した[]の十六人の王子([])の過去の姿に結縁して下種を受けた衆生」の意。「善」または「悪」のことばで答えなさい。

問四 傍線ウ・エについて、日寛上人は「開目抄愚記」で次のように述べられています。文中の[]につけてなり。これ世間の極[]・極[]を挙(あ)ぐるなり」(文段集二〇五頁)

問五 傍線オについて、次の文の[]にあてはまることばを答えなさい。

『日本の柱』とは[]の徳、『日本の眼目』とは[]の徳、『日本の大船』とは[]の徳を表し、大聖人が[]の[]の[]であることを仰せになられている。

中級試験発心プリント ⑧ / 如説修行抄 (題号編)

問 次の文は、「如説修行抄」の背景・大意・題号について述べられています。文中の^ア～^ムにあてはまる適当な言葉を答えなさい。

本抄は、^ア年の五月、大聖人が佐渡流罪中に^イにおいて御述作され、^ウに与えられた御抄である。観心本尊抄を著わされた後、鎌倉で難と戦っている門下一同を激励され、如説修行の姿を詳しく御教示されている。

本抄の大意について、日寛上人は『如説修行抄筆記』で、

「この抄の大意は、^エと^オを弘通すれば、必ず^カの大難あるの相を御書して、宗祖の弟子、^キの人なることを判じたまうなり」と本抄の大意を論じられて^クとは、^ケをいい、また^オをいう。

^コとは、本門の^サ、本門の^シの^スをいう。同筆記によれば、本抄の題号について「初めに内外・大小に通じ、次に在世・滅後に通ずるのである。」と、一つの意味があるとして述べられ、「内外・大小に通じ」は省略) 在世・滅後に通ずるとは、「人法相對に約す」「師弟相對に約す」「自行化他に約す」の三点から論じられている。

① 「人法相對に約す」とは、「如説」は^セに約し「修行」は^ソに約すのである。 釈尊の在世においてこれをいえば、釈尊所説の一代の諸経は法であり、その所説の如く自らこれを行ずるのが修行である。 釈尊の所説とは妙法蓮華経であり、修行とは、妙法蓮華経の修行である。

② 「師弟相對に約す」とは、「如説」とは^タの説くところであり、「修行」とは^チの實踐に約すのである。 ^タの所説の如く^チが修行するのが^キである。 在世においては釈尊の所説の如く、一会の大衆がこれを修行したのである。

③ 「自行化他に約す」とは、「如説」は^ツであり、「修行」は^テである。 五種の修行のうち、受持・誦・誦・書写の四種の修行は自行であり、解釈は化他である。

釈尊滅後、末法の御本仏日蓮大聖人の仏法においても、人法・師弟・自行化他の三つがある。 宗祖大聖人の如く、口^トを説き、身^トを修行し、その所説の^トを弟子檀那が修行するのである。 弟子檀那に教えるのは^ツであり、自ら修行するのは^テである。 別して、

「当抄の元意は、^ナ・^ニ・^文・^ネの^キであり、在世滅後の中には別して^ノ・^{今時のキ}の^コが最も肝心なものであり、また題号には^ハを含んでいる。」と論じられ、「如説修行の姿」を文証を引かれて示されている。

「如説修行抄の題号には^ハを含んでいる。」とは、
① 「如説とは、能説、所説があり、所説は^ヒであり、能説の教主は^フである。ゆえに、「説」の一字は、^ヘである。修行とは^シを修行すること、信じるがゆえに行ずるのであるから、これは^ホの^シであり、「修行」の二字は本門の^シである。」

② 「この本尊所住の処は本門の戒壇で、戒壇とは本尊を信じて^シを唱えるゆえに非を防ぎ悪を止めるの義である。」

③ 真の如説修行の行者について、
「法華本門の本尊を念じ、本門寿量の本尊に向い、口に法華本門寿量文底下種・事の^マの南無妙法蓮華経と唱うる時は、^ミの三業に^ムを行ずる者なり。これ則ち^ミの三業に法華を信ずる人なり」と述べられている。

すなわち、本抄は、釈尊滅後末法において、本門観心の^キの人すなわち^ノの人であることを示されている。

中級試験発心プリント ⑨ / 如説修行抄 (御文編)

問一 次の「末法流布に必ず大難あるを『標』す」段の御文について、あとの問いに答えなさい。

① 次の御文の [] にあてはまることばを答えなさい。

『夫れ以んみれば [] 流布の時、生を此の土に受け此の経を信ぜん人は [] の在世より猶多怨嫉の難甚しかるべしと見えて候なり』

② 右の傍線「猶多怨嫉」について、次の文の [] にあてはまることばを答えなさい。

「猶多怨嫉」(ゆたおんしつ)とは、[] と読み、法華経 [] の経文で、「[] の在世ですら、なお怨嫉多い」と説かれた部分である。また、「[] においては、釈迦如来在世にくらべて猶多怨嫉が多いであろう」と予言されている。万人に仏性があり、万人が仏になれると説く法華経は、それ自体、[] である。ゆえに、仏の在世でも、[] を説くと怨嫉が多いのである。当時の大聖人の門下たちは、所領没収、追放、勘当などさまざま難にあつていた。ある者は退転し、ある者は大聖人に不信を抱いた。そうした門下の疑問に答えられて、正しい仏法の修行の方途を示され、真の [] の実践をご教示された御書が「如説修行抄」である。

問二 次の「況滅度後の行者値難を『釈』す」段の御文について、あとの問いに答えなさい。

① 次の御文の [] にあてはまることばを答えなさい。

『其の故は在世は能化の主は仏なり弟子又大菩薩・阿羅漢なり、人天・四衆・八部・人非人等なりといへども [] して [] を聞かしめ給ふ [] 多し、何に況んや末法今の時は教機時刻当来すといへども其の師を尋ねれば [] なり、弟子又 [] の悪人等なり、故に [] をば遠離し悪師には親近す、其上真実の法華経の [] の行者の [] とならんには決定せり、されば此の経を聴聞し始めん日より思ひ定むべし [] の大難の三類甚しかるべしと、然るに我が弟子等の中にも兼て聴聞せしかども大小の難来る時は今始めて驚き肝をけして信心を破りぬ、兼て申さざりけるか経文を先として猶多怨嫉況滅度後・ [] と朝夕教へし事は是なり・予が或は所を・をわれ或は疵を蒙り・或は両度の御勘気を蒙りて遠国に流罪せらるるを見聞くと今始めて驚くべきにあらざる物をや』

② 次の文は、右の御文の通解にあたります。文の [] にあてはまることばを答えなさい。

その理由は、釈尊在世は人々を教え導いた主は、釈尊という立派な仏であった。その弟子たちも立派な大菩薩や阿羅漢であった。また、人界や天界の衆生、四衆、八部、人非人たちであっても、釈尊はこれらの衆生の機根を調え養って、法華経を説き聞かせられた。それでもなお、怨み嫉まれることが多かったのである。まして、末法の今時は、説くべき教え [] が示され、それを信受すべき [] が現れ、説くべき [] が到来しているとはいっても、その法を説く師を見れば、外見は [] の姿をした師匠である。その弟子も「 [] の時代を反映した貪(むさぼ)り・瞋(いか)り・癡(おろ)かさの三毒が強盛な人々である。それ故、善い師 ([]) から遠ざかり離れて、悪い師に親しみ近づくのである。そのうえ、真実の法華経の如説修行の行者の、師となり弟子・檀那になると、三類の強敵 ([]) が出現することは必然である。それゆえ、「この法華経を聞

いた日から、覚悟を決めなさい。』とある大難を三類の敵人がはなはだしく加えてくるのである」とかねがね言ってきたのである。(次のページに続く)

しかしながら、私の弟子・檀那のなかにも、そう聞いてはいても、いざ大小の難が起こってくると、今はじめて聞いたかのように、驚き、肝をつぶして、信心をしたものがある。難が起こることは、かねてから言っておいたことではなかったか、常々、經文の文証を挙げて、「如来の現在すら、猶怨嫉多し。況んや滅度の後をや。況んや滅度の後をや」と、朝夕、教えてきたのは、このことなのである。

日蓮が、あるいは[]たり、あるいは[]たり、あるいは幕府から二度のどがめを受けて[]のを見たり聞いたりしても、今、はじめて知ったかのように驚くべきことではないのではないか。

問三 次の「行者値難と真の現世安穩を明かす」段の御文について、あとの問いに答えなさい。

① 次の御文の[]にあてはまることばを答えなさい。

『問うて云く[]の行者は[]なるべし何が故ぞ[]盛んならんや、
答えて云く釈尊は[]の御為に今度・[]に値ひ給ふ、過去の[]は法
華經の故に[]を蒙り・[]は[]に流され[]は面に[]
をあてられ[]は頭をはねられ[]は南三・北七にあだまれ[]は六宗
にくまれ給へり、此等の仏菩薩・大聖等は[]として而も[]にあひ給へり、此
れ等の人人を[]の人と云わずんばいづくにか[]の人を尋ねん、然るに
今の世は[]・[]なる上[]のみ有りて[]を背きて
邪法・邪師を崇重すれば国土に[]乱れ入りて[]・[]盛に起れり、かかる
時刻に日蓮[]を蒙りて此の土に生れけるこそ時の不祥なれ、法王の宣旨背きがたければ[]
[]に任せて[]のいくさを起し[]の鎧を著て[]の劍を提げ一部八卷の
肝心・妙法五字の旗を指上げて[]の弓をはり[]の箭をはげて
に打乗つて[]をかつぱと破りかしこへ・おしかけ・ここへ・おしよせ[]・[]
[]・[]・

[]等の八宗・十宗の敵人をせむるに或はにげ或はひきしりぞき或は生取られし者は我が弟子となる、或はせめ返し・せめをとしすれども・かたきは多勢なり法王の一人は無勢なり今に至るまで軍やむ事なし、[]・[]の金言なれば終に[]の輩を一人もなく・せめをとして法王の家人となし[]・[]と成つて[]独り繁昌せん時、万民一同に[]と唱え奉らば吹く風枝をならさず雨壤を碎かず、代は[]となりて今生には不祥の災難を払ひ長生の術を得、[]共に[]頭れん時を各各

御覽ぜよ [] の証文疑い有る可からざる者なり』

② 次の言葉の語訳について各文の [] にあてはまることばを答えなさい。

イ、現世安穩

「現世安穩・後生善処」の前半。 [] 「と読む。
[] を信受する衆生が得る境涯を述べたもの。

ロ、不輕菩薩

法華經 [] 第二十に説かれる常不輕菩薩のこと。滅後の [] 時代に出現し、一切衆生に仏性があるとして軽んぜず、 [] の偈を唱えて、衆生を礼拝した。人々は不輕を輕蔑し杖木瓦石で迫害したが、礼拝をやめなかった。

ハ、天台大師

中国の隋代の僧。法名は [] 。 [] 『の三大部が有名である。

ニ、未顕真実

[] 「と読む。 [] の文。釈尊が [] の間に説いた爾前の諸経は [] であり、いまだ [] を顕していないということ。

ホ、正直捨權（正直捨方便）

[] 「と読む。

法華經 [] 第二の「 [] 」と同義。釈尊が [] の間に説いてきた華嚴・阿含・方等・般若の経教は [] の教・ [] であり、それらを捨てること。

ヘ、法華折伏・破權門理

[] 「と読む。 [] の文。
[] は [] も [] も説くが、根本的には [] を説いて、 [] である [] の理をよく破していく [] の經典である。

ト、諸乗一仏乗

「乗」とは [] のことで、悟りの境地に到達させる [] を譬えたものである。「諸乗」とは、 [] などの方便の教え。「二乗」とは、成仏の境涯へと到達させることができる唯一の教えである [] のこと。

チ、不老不死の理

法華經 [] 第二十三に「若し人病有らんに、是の経を聞くことを得ば、病即ち消滅して [] ならん」とある。この病とは、病気を含めて、人々の生命に巣くう [] などの [] を指す。

中級試験発心プリント ⑩ / 如説修行抄 (御文編)

問 次の「如説修行の相を明かす」段の御文について、にあてはまることばを答え、あとの問いに答えなさい。

『問うて云く の行者と申さんは何様に信ずるを申し候べきや、答えて云く当世・日本国中の諸人・一同に如説修行の人と申し候は と開会しぬれば何れの法も皆法華經にして勝劣浅深ある事なし、念仏を申すも真言を持つも・禪を修行するも・総じて一切の諸經並びに仏菩薩の御名を持ちて唱るも皆法華經なりと信ずるが如説修行の人とは云われ候なり等云云、予が云く然らず所詮・仏法を修行せんには を用う可らず只仰いで をまほるべきなり我等が本師 は初成道の始より法華を説かんと思食しかども 未熟なりしかば先ず たる を が間説きて後に真実たる を説かせ給いしなり、此の經の序文 にして権実のはうじを指て方便真実を分け給へり、所謂以方便力・四十余年 是なり、大莊嚴等の八万の大士 等 等のいはれを心得分け給いて領解して言く法華經已前の 等の諸經は と申しきり給ひぬ、然して後正宗の法華に至つて と説き給いしを始めとして と禁め給へり、是より已後は のみ一切衆生を仏になす大法にて より外の諸經は一分の得益も・あるまじきに末法の今の学者・何れも如来の説教なれば皆得道あるべしと思ひて或は真言・或は念仏・或は禪宗・三論・法相・俱舎・成実・律等の諸宗・諸經を取取に信ずるなり、是くの如き人をば と信ずるを如説修行の と定め給へり、此等のをきての明鏡を本として一分もたがえず と信ずるを如説修行の人とは仏は定めさせ給へり』

① 次の文は、右の御文の「問い」に対しての「夫聖人の答への結論部分」の通解です。にあてはまることばを答えなさい。

「このように定められた明鏡を手本として、一分もたがえないで、と信ずる人、すなわち、である のみを信ずる人を と仏は定められたのである。」

② 次の經文の違いを確認しながら、各文のにあてはまることばを答えなさい。

イ、「唯一仏乘」・・・法華經 第七に「は をもつて 分別して を説きたもう のみあり」とある。ただ法華經だけが の教えである。

ロ、「唯一乘法」・・・法華經 第二の「唯一 のみ有り」と読む。十方仏土の中には、唯一仏乘の教えのみあること。

③ 次の経文の言葉の語訳について各文の□にあてはまることばを答えなさい。

イ、終不得成・無上菩提

□の文。「□と読む。□の経では長期にわたる修行をしても結局は□できないと、□を打ち破った言葉。

ロ、世尊法久後・要当説真実

法華経 □第二の文。「□と読む。□は□間、□の教えを説いてきたが、いよいよ□の教えを説く、ということ。

ハ、無二亦無三・除仏方便説

法華経 □第二の文。「□と読む。□の中には□の法はなく、□の法のみあること。

ニ、正直捨方便

法華経 □第二の文。「□と読む。「諸の□の中に於いて正直に□を捨てて但□を説く」とある。釈尊が四十余年間に説いてきた華嚴・阿含・方等・般若等の経典の教え・□であり、それらを捨てるということ。

ホ、乃至不受余経一偈

法華経 □第三の文。「□と読む。真実の義を説く唯一

の

□経典である□のみを信じ、それ以外の□は一偈一句たりとも信仰の拠りどころとして持つてはならないということ。

ヘ、若人不信・毀謗此経・即断一切世間仏種・乃至其人命終・入阿鼻獄

法華経 □第三の文。「□乃至□と読む。間断なき絶望的苦悩の生命境涯を表現する経文である。

問 次の「撰受折伏の大意を判ず」段の御文について、にあてはまることばを答え、あとの問いに答えなさい。

『難じて云く左様にたるを信ずるをと云はばこそ、只一經に限りて経文の如くをこらしの如く修行せんはの者とは云われ候まじきか如何。

答えて云く凡仏法を修行せん者はを知る可きなり一切の経論此の二を出でざるなり、されば國中の諸学者等仏法をあらあら学すと云へどもの道をしらず四節・四季・取取に替れり、夏は熱く冬はつめたく春は花さき秋は菓なる春種子を下して秋菓を取るべし秋種子を下して春菓を取らんに豈取らる可けんや、極寒の時は厚き衣は用なり極熱の夏はなにかせん、涼風は夏の用なり冬はなにかせん、仏法も亦復是くの如し小乗の流布して得益あるべき時もあり、権大乘の流布して得益あるべき時もあり、の流布して仏果を得べき時もあり、然るには小乗の流布の時なり、の始めの五百年には純円・一実の法華經のみの時なり、此の時はの時と定めての砌なり、敵有る時は刀杖弓箭を持つ可し敵無き時は弓箭杖何にかせん、今の時は権教即実教の敵と成るなり、の時時は権教有つて敵と成りて・まぎらはしくば実教より之を責む可し、是をの中には法華經のと申すなり、天台云く「とまことに故あるかな、然るに撰受たる四安樂の修行を今の時行ずるならば冬種子を下して春菓を求る者にあらずや、雞の曉に鳴くは用なり宵に鳴くは物怪なり、の時の御敵を責めずして山林に閉じ籠り撰受を修行せんは豈の時を失う物怪にあらずや』

① 次の文は「釈尊の仏法」と大聖人の仏法の相対を述べています。にあてはまることばを答えなさい。

イ、釈尊の仏法は、の利益があり、の衆生が対象の本果妙。
 教主は、で、時代は
 ロ、大聖人の仏法は、の利益があり、の衆生が対象の本因妙。
 教主は、で、時代は

② 『宗教の五綱』の復習です。次の文のにあてはまることばを答えなさい。

日蓮大聖人の三大秘法の南無妙法蓮華經こそに流布すべき唯一のであることとを、・・・の五つの根拠から明かした、大聖人独自の教相判釈で、正法を知るための判断基準であり、規範でもあります。

③ 次の文は、法華折伏・破権門理]についての解説文です。文のにあてはまることばを答えなさい。

元来、真の成仏の法はこれ以外にないとするが行を根本とすることは当然であり、が『法華玄義』のなかで「法華はにして、を破す」と述べている通りである。それにもかかわらず、・時代のの修行である四安樂行などを、今の時に山中に籠って実践しているのは、時になわず無益であると大聖人は仰せになっている。また、というをわきまえない姿は、朝に鳴かないで夕方に鳴く鶏と同じで、それを「」というのであると断じられている。

中級試験発心プリント ⑫ / 如説修行抄 (御文編)

問一 次の「末法如説修行の人を明かす」段の御文について、にあてはまることばを答えなさい。

『されば・今の時・のの修行をば誰か経文の如く行じ給へしぞ、
誰人にも坐せ諸経は・の根源・独り成仏の法なりと音も惜ま
よばはり給はり給いて諸宗の人法共にして御覽ぜよ来らん事疑い無し。我
等が本師・釈迦如来は在世の間折伏し給ひ天台大師は・伝教大師は二十余年・
今日蓮はの間権理を破す其の間の大難数を知らず、仏のに及ぶか及ばざ
るは知らず、恐らくは天台・伝教も法華経の故に日蓮が如くに値い給いし事なし、彼は只
悪口・怨嫉計りなり、是は両度の御勘気・遠国に流罪せられの頸の座・頭の疵等其の外悪
口せられ弟子等を流罪せられ籠に入れられ檀那の所領を取られ御内を出だされし、是等の大難には竜
樹・天台・伝教も争か及び給うべき、さればの法華経の行者には打ち定
んで有る可しと知り給へ、されば釈尊御入滅の後が間にの行者は釈尊・
天台・伝教の三人は・さてをき候ぬ、末法に入つては並びに等是なり、我等
をの者といはずば釈尊・天台・伝教等の三人もの人なるべからず、提婆・
瞿伽利・善星・弘法・慈覚・智証・善導・法然・良観房等は即ちの行者と云はれ、釈尊・
天台・伝教・日蓮並びに弟子・檀那は念仏・真言・禅・律等の行者なるべし、法華経は方便権教と云
はれ念仏等の諸経は還つて法華経となるべきか、東は西となり西は東となるとも大地は持つ所の草木
共に飛び上りて天となり天の日月・星宿は共に落ち下りて地となるためしはありとも・いかでか此の
理あるべき』

問二 次の文は、「如説修行の行者」の受難の先例を解説した文です。にあてはまることばを
答えなさい。

末法に折伏を行ずれば、必ずなどの大難があることを改めて仰せになり、そして、
如説修行の行者の受難の先例を挙げて日蓮大聖人御自身こそがの行者で
あることを明かされている。釈尊のはともかくとして、「天台大師も伝教大師も大
難にあつていない」と仰せである。天台大師も伝教大師も「だけであるのに対し、
日蓮大聖人の場合は、と、権力による生命に
かかわる大難であり、また、弟子門下たちも牢に入れられたり、財産を没収されたりした。これほ
どの大難には「・・も争か及び給うべき」と仰せになっている。

問三 次の「末法如説修行の人を明かす」段の御文について、にあてはまることを答えなさい。

『哀なるかな今・日本国の万民・日蓮並びに弟子檀那等がに責められ大苦に値うを見て悦んで笑ふとも昨日は人の上・今日は身の上なれば日蓮並びに弟子・檀那ともに霜露の命の日影を待つ計りぞかし、只今仏果に叶いてに居住してせん時、汝等が阿鼻大城の底に沈みて大苦に値わん時我等何計無慚と思はんずらん、汝等何計うらやましく思はんずらん、一期を過ぐる事程も無ければいかに強敵重なるとも・ゆめゆめ退する心なかれ恐るる心なかれ、縦ひ頸をば鋸にて引き切り・どうをばひしほこを以て・つつき・足にほだしを打つてきりを以つてもむとも、命のかよはんほどはと唱えて唱へ死に死るならば釈迦・多宝・十方の諸仏・靈山会上にして御契約なれば須臾の程に飛び来りて手をと肩に引懸けて靈山へ・はしり給はば二聖・二天・は受持の者を擁護し・は天蓋を指し旛を上げて我等を守護して慥かにへ送り給うべきなり、あらうれしや・あらうれしや』

文永十年癸酉五月日

日蓮在御判

人々御中へ

此の書御身を離さず常に御覧有る可く候

問四 次の文は日寛上人が右の「追記」の御文について述べられたものです。にあてはまることを答えなさい。

「常ににを忘れて、を思わなければ、がに同ずることになる。また、にをいわなければ、がに同ずることになる。に数珠を持ち、に向かわなければ、がに同ずることになる。ゆえに、の本尊を念じ、の本尊に向かい、のののを唱うる時は、身口意の三業に折伏を行ずる者となるのである。これこそにを信ずる人なのである」

中級試験発心プリント ⑬ / 御本尊相貌抄 (背景編)

問 次の文は、「御本尊相貌抄」の背景・大意について述べられています。文中の^ア～^エにあてはまる適当な言葉を答えなさい。

本抄は、^ア年の八月二十三日、大聖人が五十六歳の時、^イにおいて御述作され、^ウに与えられた御抄である。

三年前の文永十一年十月、大聖人の予言通り^エ(文永の役)がありました。この時は大風が吹いて、蒙古軍は引き上げていきましたので、日本は難を逃れましたが、翌年には使者が再来しています。当時の人々は、第二次の襲来におびえ、不安の日々を過ごさなければなりませんでした。

こうしたなか、大聖人は^イにおいて、^オのため、弟子の育成と末法万年の大白法を明らかにすることに、力を注がれていました。

そして、現実社会への^カは、^キをはじめとする門下に託されたのです。

特に、本抄がしたためられた^アには、^カや^ケなどが、信仰ゆえの苦難に直面していました。まさにこの頃は、門下の人々にとって受難の時代であったわけです。

【四条金吾の受難】・・・建治三年の六月、桑ヶ谷での竜象房との法論を契機に讒奏(ざんそう)された四条金吾は、主君の江間氏から、法華経の信仰を捨てる起請文を書けとの詰問状を受け、窮地に陥りました。金吾は、たとえ所領を没収されても起請文は書かぬとの決意を大聖人に報告、九月に入って主君が病に倒れ、竜象房は病死し、金吾を主君に讒言(ざんげん)した人々も病におかされ、医术の心得のある金吾は再び主君に用いられるようになりました。

【池上兄弟の受難】・・・池上兄弟の父、康光は極楽寺良寛に帰依していた念仏の強信者であったため、兄の池上宗仲は、文永十二年と建治三年の二度にわたって勘当されている。しかし、その後、妻たちとともに父を入信に導きました。なお、大聖人は弘安五年十月十三日、宗仲の館で御入滅されました。

【南条時光の受難】・・・南条时光は、日興上人を師兄と仰いで、富士方面に大折伏戦を展開していました。建治三年は、熱原の法難の二年前です。法難後も幕府の弾圧による窮乏の中で九男四女の子供を育てながら御供養を続けました。

こうした時代背景のなかで、^ウは純真・強盛な信心を貫いていたことがうかがえます。^ウについては、下総の平賀忠治の娘で、池上宗仲の妻であるとも、松野殿後家尼の娘であるとも言われていますが、詳しいことは分かっていません。ただ、^ウがいただいた二編の御書の内容から推察すると、学識も深く、教養もあり、しかも信心強盛な女性であったと思われるます。本抄は、^ウが、大聖人から御本尊を授与され、感謝して御供養をお届けした際の御返事であり、したがって、御本尊についての細かい種々の御指導が示されています。

本抄では、冒頭に御本尊への御供養に対する謝辞が述べられ、^サが御図頭される御本尊は、^シ・^ス時代の二千年にはその名さえなく、^セ・^ソ等も頭することはできず、^タに入ってから日蓮大聖人が初めて頭されたことが述べられています。

次に、この御本尊の相貌は、^チの^ツをそのまま写したのであり、^テの当体であることを教えられています。次に、未曾有の御本尊を受持する功德を明かされ、^トにわたるとされています。更に、この御本尊は^ウ自身胸中にあることを述べられ、更に、御本尊に対する信心は^ナ「^ナ」の姿勢なければならぬことを教えられています。

最後に、^タでは御本尊を受持し^ニと唱える唱題行こそが唯一の修行であることを示されています。

問 次の「御本尊相貌抄」の御文について、あとの問いに答えなさい。

① 次の御文の [] にあてはまることばを答えなさい。

『御本尊供養の御為に鷲目五貫・白米一駄・菓子其の数送り給ひ候い畢んぬ、抑此の御本尊は在世五十年の中には [] の間にも [] より [] まで八品に顕れ給うなり、さて滅後には [] の中には [] には [] 等は内には鑿み給へども故こそあるらめ言には出だし給はず、彼の顔淵が聞きし事・意にはさとりといへども言に顕していはざるが如し、然るに [] 過ぎて [] に出現せさせ給ふべき由経文赫赫たり明明たり・ [] 等の解釈分明なり。
爰に [] いかなる不思議にてや候らん [] 等・ [] 等だにも顕し給はざる大曼荼羅を・ [] の比はじめて [] のはたじるとして顕し奉るなり、是全く日蓮が自作にあらず多宝塔中の [] すりかたぎたる本尊なり』

② 次の文は、右の御文の解説文です。 [] にあてはまることばを答えなさい。

御本尊が初めて顕れた時と、この御本尊が弘められていく時についての御教示です。
「此の御本尊は在世五十年の中には [] とは、釈尊が法華経を説いた [] を指します。 [] の間にも [] より [] まで八品に顕れ」とは、釈尊在世五十年の説法の中でも、最後の [] に説かれた法華経、その法華経の中でも [] より [] までの八品に顕れている、と仰せです。
 [] では、 [] を受けるために、本化 [] が大地から涌出し、 [] で付嘱の儀式があり、 [] で姿を消します。しかし、御本尊が説かれるのは、 [] のみであり、仏の久遠の寿命が明かされ、久遠の妙法が、その文の底に秘沈されたのです。
ゆえに、八品には、その [] と [] の次第が述べられているので、大聖人は、「八品に顕れ給うなり」と仰せられたのです。

次に、「正像（正法・像法）未曾有の御本尊なること」を明かされます。

釈尊滅後においては、 [] 等の像法時代の正師達は、 [] の文底に秘沈された久遠の妙法、すなわち御本尊を、自らの心の中でははっきりと覚知していましたが、あくまで自分の心にとどめて、敢えて言葉に出して弘めることはしませんでした。その理由について「曾谷入道殿許御書」（御書一〇二八ページ）では「一には自身堪えざるが故に二には所彼の機無きが故に三には仏より譲り与えられざるが故に四には時来たらざるが故なり」の四つが挙げられています。
ゆえに、正像（正法・像法）時代には「顕すべき人なし」とされた御本尊が、末法に至り、大聖人によって初めて [] のはたじるとして顕されることが述べられています。

そして、「多宝塔中の [] すりかたぎたる本尊なり」とは、多宝塔の中の多宝仏と、 [] 、その外にいる十方の [] など、すべての仏が一緒になって残した本尊であると仰せです。これは、 [] をそのまま写したのが御本尊であると仰せなのです。その顕さんとされたものは、大聖人の御生命と一体の [] 即 [] であります。

問 次の「御本尊の相貌を明かす」段の御文について、あとの問いに答えなさい。

『されば首題の五字は中央にかり・四大天王は宝塔の四方に坐し・釈迦・多宝・本化の四菩薩肩を並べ普賢・文殊等・舍利弗・目連等坐を屈し・日天・月天・第六天の魔王・竜王・阿修羅・其の外不動・愛染は南北の二方に陣を取り・悪逆の達多・愚癡の竜女一座をはり・三千世界の人の寿命を奪ふ悪鬼たる鬼子母神・十羅刹女等・加之日本国の守護神たる天照太神・八幡大菩薩・天神七代・地神五代の神神・総じて大小の神祇等・体の神つらなる・其の余の用の神豈もるべきや、宝塔品に云く「諸の大衆を接して 皆虚空に在り」云云、此等の仏菩薩・大聖等・総じて序品列坐の二界八番雜衆等一人ももれず、此の御本尊の中に住し給い妙法五字の光明にてらされて本有の尊形となる是を本尊とは申すなり』

① 次の文は、右の御文の解説文です。□にあてはまることばを答えなさい。

法華経 □ 第十一で、宝塔が出現して虚空に浮かび、釈尊がその宝塔の中に入って多宝仏と並座して、□が始まります。そのとき、法華経の会座につらなっていた一切の大衆も、釈尊の神通力によって虚空に置かれるのです。この□には、釈迦・多宝(仏界)から、□(畜生界)・□(餓鬼界)・□(地獄界)に至る□の衆生が列座しています。これは、釈尊自身の□の生命をあらわしているとともに、すべての人の生命の実相をあらわしています。

大聖人は、この□を借りて、御自身の生命を御本尊としてあらわされたのです。ただし、御本尊の中央にしたためられた「南無妙法蓮華経 日蓮」の首題、すなわち、□の妙法は、釈尊の法華経では明らかにされず、□の文底に秘沈されていたのです。この中央の□「□」の光に照らされたとき、十界の生命がすべて、本来の尊い姿としてあらわれるのです。それを「□」と仰せられています。

私たちの生命に約せば、□によって□や□など、本来は冥伏しがちであった生命状態が躍動するとともに、□や□など、本来もっている破壊的衝動や欲望が、その人の生命を守る本来の創造的な働きへと変わるといふことです。

② 次の御文は、経釈を挙げられて示された「段」です。□にあてはまることばを答えなさい。

『経に云く「□」是なり、□云く「□」は必ず□乃至□は必ず身土」云云、又云く「実相の深理本有の□」等と云云、□云く「□」即□とは出尊形の仏」文、此の故に未曾有の□とは名付け奉るなり、仏滅後・□には此の御本尊いまだ出現し給はずと云う事なり。』

《参考》

『実相と云うは妙法蓮華経の異名なり・諸法は妙法蓮華経と云う事なり、地獄は地獄のすがたを見せたるが実の相なり、餓鬼と変せば地獄の実のすがたには非ず、仏は仏のすがた凡夫は凡夫のすがた、万法の当体のすがたが妙法蓮華経の当体なりと云う事を諸法実相とは申すなり』

「諸法実相抄」(御書二三五九ページ)

問 次の「御本尊相貌抄」の後半について、あとの問いに答えなさい。

① 次の御文（御本尊供養の功德を説示する段）の [] にあてはまることばを答えなさい。

『かかる御本尊を [] し奉り給ふ女人・現在には [] 後生には此の御本尊左右前後に立ちそひて闇に燈の如く險難の処に [] が如く・彼こへまはり此へより・日女御前をかこみ・まほり給うべきなり、相構え相構えてとわりを我が家へよせたくもなき様に [] をせかせ給うべし、 [] を捨てて [] に [] せよとは是なり』

② 次の御文（御本尊の住処と意義を明かす段）の [] にあてはまることばを答えなさい。

『此の御本尊全く [] に求る事なかれ・只我れ等衆生の法華経を持ちて南無妙法蓮華経と唱うる [] におはしますなり、是を [] とは申すなり、 [] とは十界一界もかけず一界にあるなり、之に依つて曼荼羅とは申すなり、曼荼羅と云うは天竺の名なり此には [] とも [] とも名くるなり』

③ 次の御文（成仏の要諦の信を説く段）の [] にあてはまることばを答えなさい。

『此の御本尊も只 [] にをさまれり [] とは是なり。日蓮が弟子檀那等・ [] と [] に信ずる故によつて・此の御本尊の宝塔の中に入るべきなり・たのもし・たのもし、如何にも後生をたしなみ給ふべし・たしなみ給ふべし、穴賢・南無妙法蓮華経とばかり唱へて仏になるべき事尤も大切なり、 [] によるべきなり仏法の根本は [] とす、されば [] の四に云く「仏法は海の如し唯信のみ能く入るとは孔丘の言尚信を首とみ能く入る」と、 [] の四に云く「仏法は海の如し唯信のみ能く入るとは孔丘の言尚信を首と為す況や仏法の深理をや信無くして寧ろ入らんや、故に華嚴に信を道の元・功德の母と為す」等、又止の一に云く「何が円の法を聞き円の信を起し円の行を立て円の位に住せん」弘の一に云く「円信と云うは理に依つて信を起す信を行の本と為す」云云、 [] に云く「漢王臣の説を信ぜしかば河上の波忽ちに冰り李広父の讎を思ひしかば草中の石羽を飲む」と云えり、所詮・ [] の積分明に信を以て本とせり、彼の漢王も疑はずして大臣のことばを信ぜしかば立波こほり行くぞかし、石に矢のたつ是れ又父のかたきと思ひし至信の故なり、何に況や仏法においてをや』

④ 次の御文は「五種の妙行」についての御文です。後の語訳文の [] にあてはまることばを答えなさい。

『法華経を受け持ちて南無妙法蓮華経と唱うる即五種の修行を具足するなり、此の事伝教大師入唐して道邃和尚に値い奉りて五種頓修の妙行と云ふ事を相伝し給ふなり、日蓮が弟子檀那の肝要是より外に求る事なかれ、神力品に云く、委くは又又申す可く候、穴賢穴賢。』

「五種の修行」とは、法華経 [] 第十で説かれる五つの修行。 [] のことす。しかし、この五種の修行も、詮じつめれば [] の一行に集約されることを示されています。その [] の対象こそ [] の御本尊なのです。したがって、五種の修行をただちに行ずることができるという意味で「 [] 」と仰せです。これによって、仏法は万人に開かれたといえます。

観心本尊抄に「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功德を譲り与え給う」（御書二四六ページ）と仰せのように、釈尊が成仏するための因として積んだ修行の功德と、その結果として成就した仏としての徳が、すべて納まった妙法五字・七字の御本尊だからこそ、 [] によって成仏がかなうのです。

中級試験発心プリント①7 / 日頭宗破折編

問一 次の御文の [] の中に適切な言葉を書き入れ、その御書の名を答えなさい。

「若し善比丘あつて [] を壊る者を置いて [] し駈遣し [] せずんば当に知るべし是の人は [] の中の怨なり、若し能く駈遣し [] しせば是れ我が弟子・真の [] なり」

御書名

問二 仏法上の大罪に「五逆罪」があります。「五逆」の四つを答えなさい。

[] ・ [] ・ [] ・ []

問三 宗門が第二次世界大戦中（太平洋戦争中）に犯した謗法行為を二つ挙げなさい。

[] ・ []

問四 次の文章の [] の中に正しい言葉を書き入れて文章を完成させなさい。

日頭宗では、「法主は大御本尊と不二の尊体である」などと、「法主絶対論（法主信仰）」を立てています。しかし、日興上人は法主も誤りを犯すことを予見され、「 [] 」で「時の貫首為り」と雖も [] に相違して [] を構えば之を用う可からざる事」と仏法違背の法主を用いてはならないと仰せです。

また、「先師の如く予が化儀も [] 為る可し、但し時の [] 或は [] に於ては設い一旦の姦犯有りと雖も [] に差置く可き事」と、法主が女性問題を起こした場合の考え方まで指示されています。

問五 日頭宗では、「僧侶による葬儀がなければ墮地獄である」などと言っています。次の御文はこの邪義を破折する御文です。 [] の中に適切な言葉を書き入れなさい。

（御書一四二三ページ）「されば過去の慈父尊靈は [] に南無妙法蓮華経と唱へしかば [] の人なり」

（御書一五〇六ページ）「故聖靈は此の経の [] なれば [] 疑いなし」

問六 日頭宗では、「僧俗師弟義」なるものを主張しています。次の御文はこの邪義を破折する御文です。 [] の中に適切な言葉を書き入れなさい。

（御書一一三四ページ）「此の世の中の [] は嫌うべからず」

（御書一四四八ページ）「法師品に若し善男子善女子乃至如来使と説かせ給いて [] も [] も [] も一句をも人にかたらん人は [] の使と見えた

り」